
傷物語【影】

輝きのブライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷物語【影】

【コード】

N6102Z

【作者名】

輝きのブライト

【あらすじ】

水無月「この物語は、「影法師」の俺と暦が春休みに出会った、ある金髪の吸血鬼との思い出であって、俺がある意味人間を敵にしちまった、懺悔のような話であり、そんな俺を傍に置いてくれることを約束してくれた最愛の金髪の吸血鬼との惚気話でもあって、現在へと繋ぐ話でもある。」

「永遠なんていわないけど、お前の傍にいたい」

しゃどーヴァンプー1 (前書き)

この物語は、最近、パスワードを忘れて化物語（次）の続きである偽物語（次）の続きをかけなくなってしまうた作者により書かれています。偽物語（双）の作者である、Brandon様を作者はリスペクトしており、少々内容が被っているかもしれませんが。」

しゃどーヴアンプ01

「ミナちゃんって、阿良々木くんと仲良いよね」

「いや、そんなことはナツシングだ、羽川ちゃん。俺はヤツと意識を共有しちゃまっていて、なおかつ基本的にヤツの影から出れないため、とてつもなく不便だなんて思ったことは全然無い。むしろ、俺を曆マツだと間違っ奴が居るが、どうかしてるぜ。どうみても違いがあるだろ、違いが。身長とか身長とか。しかし！たまに菓子パン買ってくれるのが嬉しくて仕方ないぜ！」

「・・・やっぱり、仲良いじゃない。」

「「よくない！」」

・・・以上が弟、曆とその同級生であるメガネ委員長・羽川翼との会話である。

このあと、メロンパン買っていたいただきました。

美味しかったです。

さて、影法師かげほうしってヤツをご存知だろうか？
簡単に言うなら、まあ、影かげだ。

俺もまた、その影法師という怪異の一人(?)。

というか、未だに話す影なんて見たことが無い。

俺は阿良々木暦とかいうヤツ（まあ、弟だけどな）の影に潜んでいる。

潜んでいることに色々事情がある。

気にしないで欲しいな。

また機会あれば、誰かが話してくれるに違いないから。

こうして、今俺が居る場所こそが『弟・阿良々木暦の影』だ。

ヤツの中学生時代の悪評は全て俺のせいである。

残念なやつめ、へっへっへ。

器物破損（主に相手の自転車とかな。あとは………忘れ
た）。

暴行（主に、防衛な。絡まれたときと言うか、胸倉つかまれたとき
だけです。ホントだから。ね？信じれくれよ。信じてえ〜〜〜

傷害罪（上に同じ。便利だよなー、これって）。

まあ、こうして暦の身体にたまりに入れ変わらせていただいで、ヤ
ツの悪評を大きくし続けている。

故意じゃねえけどな（どつちだよ！）。

ていうか、普通見間違えるものなのかねえ？

まず、俺は曆マツより身長が12cm高い（曆は165cm。晒しぢゃおーっと）。

アイツの体にどんな影響を与えているかなんて、そんなの俺には関係ない。

よく、「身体検査のとき、入れ替わってくれえー！」なんて言われるけど、正直言います。

オメー、馬鹿かと。

いくらなんでも、怪しむだろうよ。

短期間に身長が妙に高くなってしまったら（ヨーロッパ人であるまいし）。

だが、残念なことに基本的に俺を「引っ張り出す」権限はヤツにある（「戻る」権限は俺が持ってまーす。うへへへ・・・！）。

めんどくせーよな、ホント。

まあ、でれねーこともないんだけどな。

ヤツの影の範囲だけなら。

「お前、出れるんかい！！」なんて突っ込んではいけない。これが、結構狭いのだ。

本編ほんへんでのさながら、あの金髪の吸血鬼のように。

これから話すことは、あんまり褒められたことじゃない。

というか、誇れることでもない。

これは、^{アイツ}曆の影に潜んでいることしか出来ない、臆病者でチキンで
どうしようもない、「^{かげほうし}影法師」なんていゆー怪異の俺の昔話。

そして、俺がはじめてユーレイ的な存在ではなくなつて、「誰かの
大事なナニカ」にしてくれた、俺の主人にして愛しい金髪の吸血鬼
の物語である。

しゃどーヴァンプ02

「暦のばーか。何故に俺にメロンパンかメロンパンかボン・デ・リ
ングをかわなんだ！」

「そうは言ってもな、兄ちゃん^{あん}。僕にも財布事情と言うものがある。
よって、その控訴は破棄させていただく！」

「だが、断る！」

これは、本屋の帰りのマイブラザー・ギャルゲーキングとの会話で
ある。

「ギャルゲーキングって誰だ、馬鹿兄。」

だが、同級生のスカートがひらりとめくれたのをガン見して、その
描写をことごとく原作で鮮明に描写しているような、変態さんには
言われたくないのである。

「地の文でいいいたい事言うな！」

「くそう……」

こうしてみると、長身で赤いカッターシャツにだらしなく黒いネク
タイつけたチンピラが背の低い高校3年生と話しているようにしか
見えないだが、これでも兄弟である。

だけど、一つ違う点があるとすれば。

ヤツの影に鎖で繋がれた番犬のように俺が暦の影に縛られている。

「……ところで、暦よ。例の品は？」

「はっ。殿、こちらでございます。」

と、暦が出してきたのは紛れもなくスーパーで売っていた人類最高至宝たるチョコチップメロンパン（180円）。

しかも、くしゃくしゃ。

「メロンパンだー！！！！」

「だが、兄ちゃんにはやらん！」

暦は人類最高至宝たるチョコチップメロンパンを開け、もしかもしや食べ始めた。

俺の目の前で。

しかも、やたらと美味しそうに。

「……死んでしまいたい」

「あなたは身長177と僕の双子の兄かよ！？……なんて突っ込みたくなるほど身長が高いのに、そんなこと言っなよ！？」

なんてことを言っていたら。

声が聞こえた。

「そのうぬ、血をよこせ」

「えっと、兄ちゃん？」

猟奇殺人事件の死体のようなものを俺は見ちまったというのに、それは、とてつもなく美しかった。

世界中の何処を探してもいないような、絶世の美女だったのだから。滑らかで長い金髪。

シックなドレスはボロボロ。

四肢は分断されており、切断面が嫌でも見えてしまう。

右腕の肘の辺り。

左腕は肩の付け根。

左脚は膝の辺り。

右脚だけは切断部分が無く、鋭利な刃物で切り裂いた後があったが、他には引きちぎった後があって、全然統一性が存在していない。

なのに、俺は呟いてしまった。

明らかに人間でない、ソイツに。

「綺麗、だ・・・」

「兄ちゃんが綺麗なんて言うって、珍しいよな。まるで、世界を面白無さそうに見てる目してるのに」

それはお節介にもほどがあるといえよう。

「うぬじゃ。そこの背の高いの。儂を助けさせてやる」

みよーに偉そうな口調で、瀕死状態だというのに彼女は言う。

まるで、獲物を見る獅子のような目で俺と暦を見ながら。

だけど、俺は見た。

彼女に影が無い事を。

「えーっと、そうだ、救急車！」

「そんなモンはいらんわ。うぬらの血をよこせ」

「我が名はクスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード。鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼じゃ」

犬歯をむいて、彼女は笑ってみせる。

吸血鬼。

古今東西、あらゆる創作で有名な吸血鬼が何故こんな田舎町に居るのだろうか？

「うぬの血を寄越せ。我が血肉として飲み込んでやろう。じゃから、寄越せ」

暦は携帯電話（京セラのヤツ）を取り出し、電話をかけようとする。そして、チラリと傷口の詳細が見えた。

そう、生物学的に不可能なことが目の前にあったのである。

出血が、全くと言っていいほどなかった。

「兄ちゃん。」

「分かってる。変わるんだろ？」

俺と暦は精神的にも身体的にも『影』と言つ名の鎖を通して、密接に繋がっている。

だから、影に居る俺が暦と入れ替わることだってできるのだ。

「ようやく、分かったか？取るに足らん人間ごときが血肉となれることを光栄に思え」

空気マンマンかよ。

ついていけねーよ、美人さん。

ヤツが俺の存在に気づいたのはヤツが6歳のとき。

『そのときから既に友達が居ないスキル』を発揮していたヤツは俺に気づいてしまったのである。

早いもんだよな、ホント。

両親と火憐ちゃんかれんと月火ちゃんつきひが俺に気づいたのは、それから6年後。

結構、待たされていたものである。

そのときまで、暦の独り言だと思っていたらしい。

ドンマイ、暦。

ドンマイ、俺。

俺は暦の意識の中に潜り込む。

本来の俺は背が高いので、少し窮屈だったが、俺の存在そのものが『不安定で幽霊のようなもの』なのでキツさとかは関係ないのだが。

家族に気づかれてから、俺達は一段と仲良くなった。俺は名目上、『いないこと』になっているので、学校に通ったことは無い。だけど、たまに出てきて俺はヤツの成績を上げてやったりしてる。

たまに、新記録出しちまうこともあったりするが（人間の範囲でだけ）。

入れ替わりが完了すると、俺は勢いよく走った。

「来てねーか？」

「来てないよ。」

チラリ、とヤツのエロ本が見える。

クソッ、シリアスも糞もあつたもんじゃねえな。

「死ぬのはいやだ、死ぬのはいやだ。消えたくない、なくなりたくない……！やだよお！誰か！誰か！誰か！」

周りが静寂と化しているため、嫌でも俺の耳に入っちまう。

思い出しちまうじゃねえか、昔のことを。

暦は言う。

金銭無所持の俺に何かを買って欲しいと頼むかのように。

「少し変わってくれ」

「ああ。」

そして、暦が「シャバ」に出て俺はいつもどおりに「影」へと引込む。

いつも通りのことだ。

俺はアイツの「装備品」のようなもの。

アイツは俺のことを羨ましがるけど、俺のほうが羨ましい。

「個人」として認めてもらえるあいつが。

「血はどれくらい、居るんだ？」

「うむ。うぬ一人くらいで足りる」

「それじゃ、僕が死ぬよ」

俺は曆に語りかける。

俺に代われ、と。

「よオ。阿良々木　　ってゆーヤツだ。」

「妙に偉そうなやつが出てきたな……。二人居るのか？」

いつものことだ。

俺が名乗ろうとすると、名前だけ抜けている。

未だに父さんにも母さんにも名前で呼んでももらえない。

いつも、「お兄ちゃん」だけだ。

火憐ちゃんには「にーに」、月火ちゃんは「ヤン兄（ヤンキー兄貴の略らしい）」と呼ばれる。

大体、この位だろう。

俺を認識できているのは。

でも、彼女は違った。

家族でもなんでもない他人だというのに、俺を認識、できていた。

「そんなもんなんじゃねえのかな？」

「まあ、いいや。俺の血を飲め」

「え？」

彼女は驚いた顔をする。

それもそうだ。

さっき、逃げたやつが突然帰って来て、そんな事を言い出したら。

「兄ちゃん！」

「黙れ！たまには、我儘言わせろ」

俺は吸血鬼に近づく。

傳くようにして、俺は首を差し出した。

「ずっと、暦が羨ましかった！誰かに「個人」として認識されたかった！ヒーローにもなりたかった！でも、俺みてーなヤツじゃ無理っぽい。ああそうさ、次に生まれ変わったら、ヒーローにもなつてやるし、俺みてーなヤツが誰かに認識されるよう、足掻けるようになつてやる！次は、次こそは、・・・主役になつてやる。」

「なにいつてんだよ、兄ちゃん！」

暦の静止を聞かず、俺は吸血鬼に言う。

「だから！俺の血を吸え！」

「・・・あ、ありがとう」

か細い声が聞こえた気がした。

次の瞬間、俺の首元に鋭い二つの痛みが走る。

走馬灯のように蘇るは、両親と妹達と・・・そして、弟^{こよみ}。

一番惜しかったのは、あの金髪の吸血鬼の笑顔が見れずに死ぬことだった。

しゃどーヴァンプ03

あれから、暦は家に帰れただろうか？

月火ちゃんと火憐ちゃんはどうかだろうか？

「起きろ、従僕。」

回想に浸る前に俺は起こされてしまった。

暦でなければ、縁も所縁も無さそうな少女だった。

金髪は見た感じサラッサラだ。

あー、撫で回したい。

「何を考えておる、さつきから・・・」

蹴られた。

呆れたような顔をする少女に、回し蹴りとドロップキックを喰らってしまいました。

「考えるって言ったってなあ・・・」

俺は辺りを見回してみる。

辺りは夜だったはずだ。

しかも、こんな廃墟には電気はないはず。

なのに。

なんで、俺には見えているんだ？

そして、脇で俺を心配そうに見ている金髪幼女に問いかけてみる。

「気分はどうだ？」

「まあまあじゃな。この身体は中身がスツカスカで、非常用の体と言ったところじゃからのう……。というか、早くうぬには手足を取り返してもらわねば……。」

ビクッ、と驚いたのを隠すかのように、金髪幼女は腕を組み、唸る。

しかし、ヤツの姿がないな……。

「おい、従僕。」

「なんだよ。」

「僕のことは、ハートアンダーブレードと呼ぶが良い。」

「すまんっ！そこまで、俺人の名前おぼえれない！だからさ、キスシヨットでいいか？」

申し訳なさそうに俺は手を合わせる。

「そ、それなら仕方ないのう！……まあ、あのような時じゃった

し、キスシヨット呼ばわりも許してやるとしよう。・・・ただし、うぬだけじゃ」

何故か焦りだすキスシヨット。

つか、キスシヨットはまずかったかな？

外国の名前はよく分からないケドさ。

うーむ、可愛いな。

「え？ああ、そっか。俺、吸血鬼になっただよな・・・」

両手を見る。

刃のように長い爪。

そして、自分でも分かったのは八重歯が伸びているということだ。

チラリ、と俺は黒い裾が目に入った。

「なあ、キスシヨット。この黒い半袖のコートはなんだ？」

「ああ、それか。儂もきこうと思っておったところじゃ。何故か、うぬを我が眷属にした途端、うぬのその服を覆うかのように、現れたのじゃ。吸血鬼の物質創造スキルというわけでもないようじゃが、どういう仕組みなんじゃ？」

それはこっちが聞きたい。

俺だって、分かんないのだから。

しかし、ブランド物みたいだよなー。

この半袖真っ黒コート。

「・・・で、キスショットの手足を奪ったのはどんな奴らでどこに居るんだ？」

「向こうは吸血鬼専門のプロフェッショナルじゃ。こちらが出向けば、向こうが勝手に探してくれるじやろう。・・・やってくれるな？水無月^{ミナツキ}」

「み・・・なんだって？」

「うめの姓名はどうでも良いとして、うめに名をくれてやる。あのとき、うめは俺に名乗ろうとしていたけれど、名乗れなかったのじやろっ？」

キスショットは座り込んだままの俺に優しく微笑みかける。

まるで、俺の事情を知ったような表情で。

「まあ、そうだけど・・・まず、苗字はあっても名前はなかったからさ。ずっと、二人称でしか呼ばれたことなかったし・・・」

「じゃから、俺がつけてやった。名の意味は『水面に映る月のように美しいけれど、そこに無く掴み取ることが出来ない』。・・・正直、あのときのうめにときめいてしもうたわ。どうしてくれる、我

が従僕。」

キスショットの言いたいことはわかる。

自分のために、手足を取り戻せとっているのだ。

返事は一つしかない。

「御意。我が主」

キスショットに言われたとおり、俺はその辺をフラフラとしていた。

十字路に差し掛かったそのときだった。

正面。

右。

左。

それぞれを三人の男達が立ちふさがっていた。

見上げるような長身にカチューシャが特徴的で、二本の波打つ大剣
フランベルジェを両手に持った男。

ドラマツルギー。

キスショットの右足を奪った、ヴァンパイアハンター。

どこか幼く、俗に白ランと呼ばれる物を来てベビーフェイスが特徴的だが、肩に担いでいる巨大な十字架がそれら全てを打ち消している。

エピソード。

キスショットの左足を奪った男。

他の二人とは違い、武器を持つてはいないが、ハリネズミを思わせる髪型と神父風のローブが特徴的な男。

ギロチンカッター。

キスショットの両腕を奪った男。

「
」

「ドラマツルギーさん、現地の言葉でお願いしますよ」

「むっ、すまない」

「つか、コイツがあの子の従僕か？なんか、嫌な予感しかしないな・・・」

こいつ等は、俺のことを全く見ていない。

まるで、『取るに足らない』と言いたげに。

「つか、どうすりゃいいんだ……？」

キスショットは吸血鬼退治の専門家と出くわした後、どう戦えばいいのか教えてくれなかった。

次の瞬間、俺の目の前に地面が大きく割れていた。

「ありゃ？刺さってねーのかよ、マジ受ける。」

「エピソードさん、なるべく早く終わらしましょう」

「それもそうだな。」

近づいてくる、三人。

クソッ、何も出来ねえのかよ……！

振り下ろされる十字架。

振り落とされるフランベルジェ。

思わず目を閉じた。

だが、それらは一切振り下ろされることは無かった。

「こーんな、街中で物騒な物振り回すなんて元気いいなあ」

「・・・何かいいことでもあったのかい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6102z/>

傷物語【影】

2011年12月24日05時50分発行